

タイトル: 研究結果: CBD の用途はリラクゼーション・睡眠改善・不安軽減・健康増進・抑うつ軽減であることが明らかに。

サブタイトル: 日本臨床カンナビノイド学会と Green Zone Japan が国内初のユーザー調査結果を学術誌にて報告

概要:

日本臨床カンナビノイド学会副理事長の正高佑志医師（一般社団法人 Green Zone Japan）と同学会前理事長の新垣実医師（医療法人新美会）らの研究チームは、日本国内のカンナビジオール（CBD）製品ユーザーを対象とした匿名のオンライン調査を実施し、日本における CBD 製品の用途や有効性について初めて明らかにしました。本研究成果は国内の査読学術誌である『日本統合医療学会誌 Vol.15 No.2(2022年11月)』に掲載されました。

研究背景:

大麻草に含有される成分の一種であるカンナビジオール（CBD）は難治てんかんの特効薬として治験実施が予定されていますが、同時にサプリメント・化粧品・嗜好品として幅広く流通し、2021年の国内市場規模は180億円と試算されています。これらの用途や有効性についての調査はこれまでに行われたことがありませんでした。

方法:

CBD 使用経験者（過去1年以内に THC を含む大麻使用者を除く）を対象とし Facebook、Twitter、Youtube などの SNS を用いて回答を依頼したところ、799 件の有効回答が得られました。CBD 製品の用途として多かったのはリラクゼーション(77.8%)、睡眠改善(66.3%)、不安(56.2%)、健康増進(50.8%)、抑うつ(47.8%)であり、使用者は平均して 5.5 の目的に対して CBD を使用していました。

結果:

使用前後の各症状についての重症度自己評価で 50%以上の改善を自覚していた割合は以下のとおりでした。(頭痛 70.9%、慢性疼痛 67.8%、睡眠障害 67.4%、物質使用障害 66.7%、神経痛 65.5%、抑うつ 62.4%、不安 59.6%、関節痛 54.5%、膠原病 50.0%、皮膚疾患 49.7%、てんかん 42.1%、ぜんそく 37.8%)

一方で副作用が疑われる症状の出現率は 7.4%で、重篤なものは認められませんでした。

図1: CBD使用の目的 (N=799)

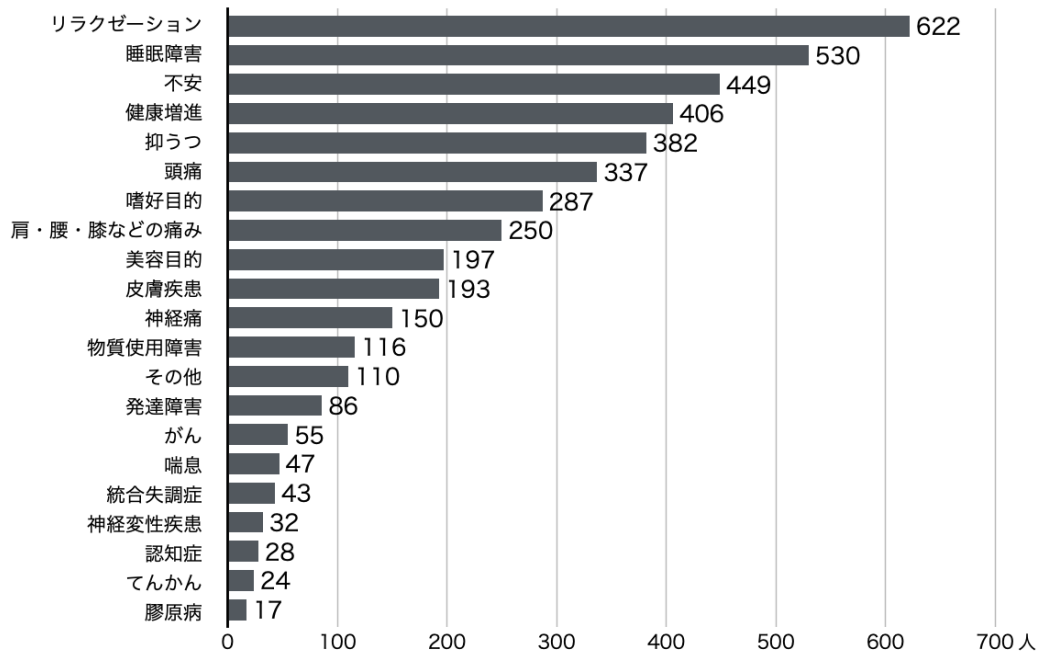
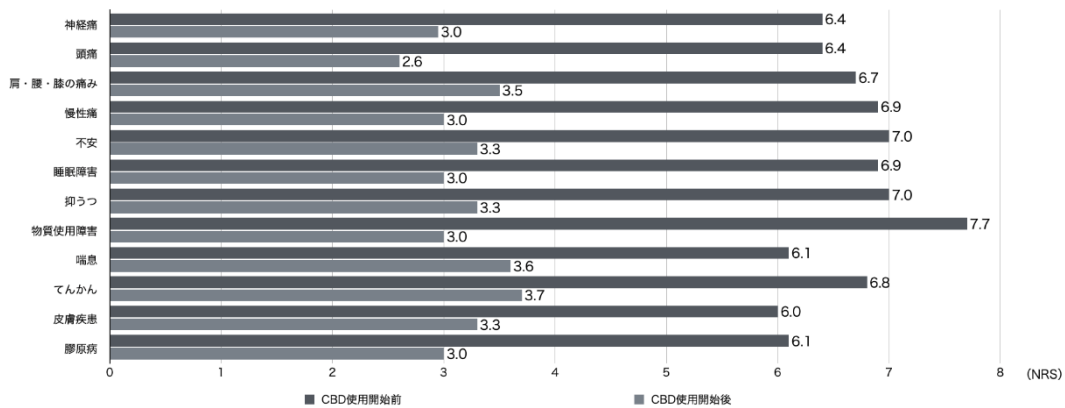


図2: CBD使用前後での自覚症状の変化



本研究成果の意義：

この結果は日本国内で食品・サプリメント・雑貨として利用されている製品が使用者の生活の質改善に貢献していることを示す初の検証結果であり、今後てんかん以外の症状に対しても、医療用途での適応拡大を検討する意義があることを示すものと考えられます。

【研究責任者プロフィール】

正高佑志（まさたかゆうじ）1985 年生まれ。熊本大学医学部医学科卒。医師。日本臨床カンナビノイド学会副理事長。大麻についての啓発団体”一般社団法人 Green Zone Japan”代表理事。2020 年に大麻由来のサプリメント(CBD オイル) が国内の難治てんかん症例に有効であったことを学術的に報告し、国内での治験に向けた取り組みの端緒を開いた。著書に「お医者さんがする大麻と CBD の話（彩図社 2021 年）」がある。

【掲載論文についての詳細】

タイトル：日本におけるカンナビジオール製品の使用実態に関する横断調査

著者：正高佑志（研究責任者）、杉山岳史、赤星栄志、新垣実

掲載誌：日本統合医療学会誌(Vol.15 No.2 2022 年 11 月号)

発行：一般社団法人 日本統合医療学会

ISSN：2435-5372